

---

# 我が家に天使が舞い降りた

ナル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

我が家に天使が舞い降りた

### 【NZコード】

NZ9595NZ

### 【作者名】

ナル

### 【あらすじ】

神様の存在を信じる普通の高校生、天塚正人。あまつかまさと彼の両親は海外に共働きをしているため現在は一人暮らしを謳歌していた。そんな正人の目の前に現れたのはどこか幻想的でありながら美しい少女だった。だが彼女の背中には人間には生えていないはずの“羽”が付いていた。

## 前略・天使が舞い降りたようです

神様の存在を信じるかと言われば、おそらく僕は「はい、信じます」と躊躇いもなく言えるだろう。

では神様は人間の味方であるか？と聞かれたときに僕は「いいえ、味方ではありません」と答えるだろう。

僕こと天塚正人（あまつかまさと）はこの世の万物は全て神様の手によつて創られたと子供の頃から信じている。高校生になつた今では宇宙はビックバンやらなんやらで生まれたと教えられているが、それすらも神様が創り出したものだと思い込んでいた。

神様は万能である。縁結びの神様もいれば学業の神様、果てには米の中にも7人の神様が存在すると聞いたことがある。

隅から隅まで神様の存在が言い伝えられているのだ、どれか一つぐらい本物の神様が混じついてもおかしくはないだろう。

しかし、それでも神様は人間の味方ではないんだなあと僕はつくづく思はされる。

本当に神様が人間の味方だつたら、この世は人間がもつと生きているはずだ。

今現在の人類の人口は詳しく覚えていないが、確か70億人だつたような気がする。

これだけの数字を聞くとちつぽけな存在である僕は最初こそは眩量が起きたが、今では少ない数字だと思えてくる。

別に70億が少ないと言つてはいるわけではない。僕が言いたいのはこの70億のなかからどれだけの数がちゃんと生きていけるのだろうかと考えているのだ。

僕はテレビや新聞でしか情報を得られないが、世界中ではまだに戦争が行われているらしい。

そして生まれて間もない子供たちが今もこうして死んでいるのかかもしれない。

それは日本でも変わらない。事実僕たちは転んだ拍子でそのまま死んでしまうかもしない。今の例えはあまりにも突拍子過ぎたかもしれないが、否定できないのもまた一つの事実である。

僕たち人間は意外と脆く創られている。もし神様が人間の味方だつたらもつと頑丈に創つておくべきだろう。

僕たちは、意外と神様に愛されていないかもしない。そう考えるときもあつた。

さて、ここまで色々と語つてきたが実を言うとあまりにもどうでもいいことだ。どうでもよすぎて笑えてくるぐらいだ。

神様が人間の味方なのか、そうでないかは僕個人の意見で勝手に決め付けてはいけない。やはり神様本人の意見を聞くべきだろう。普通に人生を生きていたら神様に意見を聞ける機会だなんて存在しないだろう。今の僕でも不可能だ。しかし僕にはその可能性がある。

なぜなら……

僕は今、天使と同居中だからだ。

## その1・公園で少女が眠っていました

僕の名前は天塚正人（あまつかまさと）。特技はない。強いて言うなら両親の影響で外国語が多少話せる程度だが、多少離せる程度でありあまり役に立たない。

両親が海外で働いており家に帰つてくると癖が抜けていないので時々外国語で話すときがある。その影響で外国語を無意識に覚えてしまったのだ。

イタリヤ語やドイツ語が役に立つかは分からぬけど英語は役に立つた。おかげでテストでは80点以下を取ったことがない。さて、そんな地味で普通な僕は習慣となっている朝のジョギングをするために走っていた。

公園に辿り着くまではいつも通りのだった。毎朝犬の散歩をしているおじさんとも会つたし、パン屋で働いているおばさんにも出会つた。そう、いつも通りだ。

だが、そんな僕の日常を壊すかのように“それ”は存在していた。朝のジョギングもラストスパートとなり公園に辿り着いた瞬間、僕の視線が“それ”……少女を映し出してしまった。

別に少女を見つけたぐらいで立ち止まるほど僕は女性に対して感情などしていない。いつも通りだつたらスルーしていただろう。

だが、なぜかその少女は公園のベンチで寝ていたのだ。  
しかも服装がかなり痛々しい。具体的に言つと日曜の朝に放送している女の子向けの番組に登場する女の子の変身後の衣装を着ていた。あのフリルがいっぱい付いている服である。

「…………」

流石に状況が理解できなかつた。軽快な足取りも止まつてしまつた。

不振に思いながらも僕はベンチで眠っている少女に近づいてみた。顔立ちは僕よりも幼そうで、短い水色の髪が太陽の光に反射されて輝いて見えた。

顔だけ見ると可愛いんだけど、服が残念すぎた。

「あ、あのー……」

声をかけてみるも、反応はなかつた。具合が悪いのかと考え表情を確認してみたが、そんなことはなかつた。心地良さそうな顔をしながら眠つていた。

「……流石に放つておくわけにはいかないよな」

僕は「関わりたくない」とこつ心の声を払拭させながら少女の体を強く揺すつた。

「すいませーん！ 朝ですよー！」

「……うーん、後五分……」

「寝惚けていいで起きてくださいー その…………いろんな意味で危ないですよー！」

「うう……分かりましたよ起きますよ

肩を強く揺すつたのが功を成したのか、少女はゆっくりと体を起こしてくれた。

「……はれ？ 」「うーん？」

少女はまだ寝惚けているのか、頭をカクンッと揺らしながら辺りを見渡していた。

「うーん……なんであたしソレで眠っていたんだっけ？」

まだ意識が覚醒していないのか、ろれつが回っていなかつた。本音を言えばもう放つて置きたい気分だったのだが、なんかちょっと危なつかしいのでもう少しだけ付き合つことに決めた。

## その2・田覚めのキッス

「……あの、大丈夫ですか？」

「……ええ、大丈夫ですよ。ようやく田覚めてきましたよ」

少女声は先ほどとは違ひしつかりと口が回っていた。それでもまだ意識が覚醒しきっていないのかフラフラと頭が揺れていた。

「えつと……そろそろあたしは行かないと……」

少女はまだ意識が覚醒しきっていないにも関わらず無理矢理体を立たせては公園の出口に向かつて歩いていった。傍から見てる側としてはとても危なつかしく、本来なら体を支えてあげたほうが良いのだろうけど、それ以上に「コイツ笑える」と僕の中の何かが囁いていたため、もう少しだけ少女の危ない足取りを眺めることに決めた。決して可笑しいから見ているわけではない、と言えないのが悲しい。

「あ

この一言は僕のものである。公園の出口に向かつて歩いていた少女が体のバランスを崩して正面から地面に向かつて倒れてしまったのだ。情けないことに少女は公衆の面前で地球とキスをした。朝の寝起きのキスというレアなシーンを見て僕はつい言葉を漏らしてしまったのだ。

さて、本来なら体を起こしてあげるのが良い人間の行動なのだろうが、生憎と僕は悪い人間である。もう少しだけ少女のみつともなり姿を眺めておくことに決めた。

……。

……。

「それにしてアレは絶対に痛いだろ?」とは起きないよ  
うだ。残念で仕方がない。

「反応無し。どうやらこれ以上待つても可笑しいことは起きないよ  
うだ。」

泣く

僕は暢気に呟きながら軽い足取りで横になつて倒れている少女に  
近づいていった。

「おーい、大丈夫ですかー?」

僕は「これ大丈夫じゃないんだろ?」と絶対顔面に傷が付いてるよ  
と考へながら少女の安否を尋ねた。案の定、「大丈夫じゃないです  
ー」と情けない声が返事として少女の口から発せられた。

「喋れるってことは大丈夫ですね。よかつた、おかげで110番  
に尋ねる手間が省けましたよ」

「あれ? 110番つて警察ですよね?」

「ええ、だから死体発見の報告をせずに済んでよかつた、と言つ  
ていたんですよ僕は」

「酷い! 今あたしのことを殺してましたね! ?」

「殺すだなんてとんでもない。貴女が勝手に死んだだけじゃない  
ですか」

「そういう意味じゃありませんよー?」

少女は「ふんすか?」と呟きながら立ち上がりては僕に対しても怒  
鳴っていた。顔面のほうは残念なことに傷ができるなかつたが右  
肘の辺りが少し擦り剥いていた。

その3・腹が空くのはまあ仕方がない

「うう、擦り剥いてる……」

少女のほうも右肘の傷に気がついたのか、涙目になりながら擦っていた。

「はあ、仕方がない」

僕は溜息をつきながらポケットの中から手拭を取り出した。本当は汗を拭ぐために用意したものなのだが止むを得ない。

「ううと待ってください」

僕は少女にそう声をかけてから公園に設けられていた水道に近づいて蛇口を捻った。そして手に持っていた手拭を少し濡らして再び少女に近づいた。

「ううと痛いかもしれないけど我慢してください」

僕は少女の右肘に対して濡れた手拭を押し付けた。少女は「いたっ！」と反射的にビクリと驚いていたが、次第に慣れていったのか大人しくなってくれた。僕はそのまま手拭を縛り擦り剥いていた傷を覆うように隠した。

「えっと……これで平氣かな？ まあ所詮応急処置程度なので早く家に帰つてしまつかりと手当てすることを進めますよ」

僕がそう言つと、少女は「あ、はい」と困惑ながらも首を縦に

振つた。

「あ、えっとですね……でもあたし

ぐう～。

少女が何か言つたよつた気がしたが、その声は変な音によつて搔き消されてしまった。

「…………？」

「あ、えっと……その……」

少女はなぜか恥ずかしそうにしながら目を泳がせていた。

「…………もしかしてお腹が空いたんですか？」

僕がそう尋ねると、少女は無言で首を立てて振つた。

「えっと、確かあつちのまつこコンビニがありましたよ」

僕は自分の記憶を思い出しながらコンビニがある方向を指差した。

「…………あたしお金持つてない」

「…………マジすか？」

「…………マジです」

「…………はあ」

僕は再び溜息をついた。

「もぐもぐもぐもぐ……」

僕が座っているベンチの横で先ほどの少女が笑顔のまま焼きそばパンを口の中に詰め込んでいた。

どうやらこの少女お金がないついに家も近くじゃないということらしい。本当にもう放つておこうかと考えたのだが少女の腹から発せられる音が異様にうるさい、なんだか笑える通り越して可哀想になってしまい、仕方がなく僕がコンビニのパンを奢つてやつたのだ。

この少女、僕が金を払つてやると詰つた瞬間田の色を変えてコンビニに向かつては籠の中にパンを詰め込んでいきやがつた。まさかコンビニに備え付けられている籠を使う日が来るとは思つてもいかつた。

僕は軽い財布の中を確認してみた。

「…………父さんたちの仕送りって何日だっけ…………」

僕は再び溜息をついた。

さつきから溜息ばつかしている気がする。だから幸せが逃げて不幸が続いてしまうのだろうか？ これからは注意せねば。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9595z/>

我が家に天使が舞い降りた

2011年12月31日19時45分発行